

【高知】県内3施設目の乳腺センター、高知日赤が多職種連携を強化-甫喜本憲弘・高知赤十字病院乳腺センター長に聞く◆Vol.1

乳腺外科医は多くの病院で1～2人、県の医療課題が構想の背景

2026年8月31日（月）配信 m3.com地域版

高知赤十字病院（高知市）は2026年7月1日、乳腺に関わる診療を複数の診療科と多職種で連携して行う「乳腺センター」を開設した。県内では3施設目。乳腺外科を窓口に、治療内容や患者の希望に応じて各診療科や専門職が関わる体制を整えた。センター化により、各職種がより主体的に患者を支える動きも生まれているという。開設の経緯や連携の流れ、現在の手応えについて、甫喜本憲弘センター長に聞いた。（2026年8月10日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



甫喜本憲弘氏（本人提供）

県内2センターの開設者は、乳腺外科の恩師

——乳腺に関わる診療を複数の診療科と多職種で連携して行う「乳腺センター」が2026年7月1日、高知赤十字病院に開設されました。まずは、構想の端緒をお聞かせください。

構想は1年ほど前から温めていました。背景にあったのは、高知県内の乳腺診療を少人数の医師が支えている現状です。多くの病院では乳腺外科医が1人、多くても2人で診療しており、個々の医師にかかる負担が大きくなっています。今後、県内の乳腺診療体制が変化していく可能性もある中、当院としても特色を明確にし、外部に打ち出していく必要があると考えていました。

そこで、関連する機能を「乳腺センター」という枠組みでまとめ、地域に分かりやすく示すことにしました。高知県内では高知大学、近森病院に続く3施設目となります。センター化をきっかけに当院の乳腺診療を広く知ってもらい、患者さんに治療先として選んでもらえるようにしたいと考えています。

——県内では高知大学と近森病院に乳腺センターがあります。こうした前例も参考にされたのでしょうか。

実は、その2つの乳腺センターを立ち上げたのは、私の恩師です。現在、近森病院の乳腺センター長を務める杉本健樹先生で、高知の乳腺診療を長く牽引してこられました。私も高知大学にいた頃、杉本先生の下で一から乳腺診療のいろはを叩き込まれました。

杉本先生は2015年に高知大学で乳腺センターを立ち上げ、近森病院に移られた2024年に同院にもセンターを開設されました。以前から、センター化によって患者さんにどのようなメリットが生まれるのかを聞いていましたし、今回の構想を具体化する上でも、そのご経験や考え方を参考にさせていただきました。

院長の方針表明で準備加速、数カ月で開設へ

——恩師のご活動も、今回の構想を後押ししたのですね。実現に向けて難しかった点はありましたか。

大きなハードルは、やはりマンパワーでした。看護師や薬剤師など、各職種とも人員に余裕があるわけではなく、センターにどこまで人を割けるのかという点で、なかなか前に進まない時期がありました。私自身、溝渕樹院長に構想をプレゼンして以降も、相談や提案を重ねていました。

状況が動いたのは、今年の春です。溝渕院長が「夏をめどに立ち上げる」と方針を示し、準備が一気に加速しました。薬剤師やリハビリスタッフ、管理栄養士など関係部門の責任者に集まってもらい、ワーキンググループで現状の課題や今後の関わり方を整理。そこからわずか数カ月で、7月1日の開設に至りました。

——センターでは、各診療科や多職種がどのように連携して患者を支えていくのでしょうか。具体的な流れを教えてください。

基本の窓口は乳腺外科です。紹介を受けた患者さんをまず私が診察し、その後は治療内容や患者さんの希望に応じて、必要な診療科や職種につないでいきます。診断では、病理診断科が組織を調べ、放射線科が画像診断を行い、治療方針の判断を支えます。乳房再建を希望される方には形成外科、放射線治療が必要な場合には放射線科が関わります。手術で入院する患者さんには、リハビリスタッフも積極的に関わります。

このほか、外来や病棟の看護師、薬剤師、管理栄養士、メディカルソーシャルワーカーなども必要に応じて加わります。乳腺外科を入り口に各分野の専門職が連携し、一人の患者さんを多方面から支えるのがセンターのイメージです。

「餅は餅屋」、個々の専門性を生かして患者を支える

——7月13日にセンターとして初の合同カンファレンスが開かれ、医師や看護師など17人が参加したと報じられています。センター化によって、多職種の関わり方に変化はありましたか。

乳腺カンファレンス自体は6年ほど前から月2回開いていましたが、以前は参加する職種や人数が限られ、患者さんの情報共有が中心でした。センター化してからは関係するスタッフに広く声をかけられるようになり、それぞれがより主体的に関わってくれています。

変化の一つが、肥満のある患者さんへの栄養指導です。以前は私たちから依頼していましたが、今では管理栄養士が必要性を判断し、食事内容の調整まで自発的に進めてくれます。センターという枠組みができたことで、職種間の連携のハードルはかなり下がったと感じています。まさに、「餅は餅屋」ですね。それぞれが専門性を生かして動けるよう、メンバーには「患者さんのために良いと思うことは、ぜひやってほしい。何かあれば責任はこちらで取るから」と伝えています。

◆甬喜本 憲弘（ほきもと・のりひろ）氏

1999年高知医科大学（現・高知大学医学部）卒業。2008年高知大学医学部外科学講座（外科1）に助教として着任し、乳腺・甲状腺を専門に診療。2012年高知赤十字病院に赴任。現在、同院第三外科部長、乳腺センター長。日本外科学会指導医・専門医・認定医、日本乳癌学会指導医・専門医、マンモグラフィ読影資格（評価AS）、がん治療認定医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索



【高知】患者自ら高知日赤を希望、乳腺センター開設に反響-甫喜本憲弘・高知赤十字病院乳腺センター長に聞く◆Vol.2

乳がん連携パスで地域と連携、患者の安心感を重視

2026年9月7日（月）配信 m3.com地域版

県内3施設目となる乳腺センターが高知赤十字病院（高知市）に開設されてから1カ月。同センターへの紹介を患者が希望する例もあり、地域での認知が広がりつつある。甫喜本憲弘センター長は「多職種で患者さんの思いを共有し、それぞれの専門性を生かしつつ支えることで安心感を高めたい」と話す。乳腺外科医としての歩みや、乳がん連携パスを活用した地域との連携、センターの展望について聞いた。（2026年8月10日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



甫喜本憲弘氏（本人提供）

「ニュースを見ましたよ」高知日赤を知る契機に

——高知赤十字病院に乳腺センターが開設されてから、1カ月が過ぎました。地域からの反響はいかがですか。

テレビなどで取り上げていただいたこともあり、「ニュースを見ましたよ」「乳腺センターができたんですね」などと声をかけてもらうことが増えました。クリニックで乳がんを診断され、「治療を受けるなら新しくできた乳腺センターに紹介してほしい」と患者さん自身が希望し、当院に来られたケースもあります。

地域の医療機関に向けては開設に合わせてチラシを作り、周辺の病院やクリニックにお送りしました。これまで当院と関わりのなかった医療機関では、高知日赤で乳腺診療を行っていること自体、十分に知られていなかった可能性もあります。報道などを通じて知ってもらい、患者さんから希望があったときに紹介先の一つとして思い浮かべてもらえるようにすることも、センター開設の狙いの一つです。

——資料によると、高知赤十字病院では治療計画などを共有する「乳がん連携パス」を活用し、地域の医療機関と連携しているそうですね。

連携パスは10年ほど前から使っています。当初は細々とした取り組みでしたが、現在は連携パスを活用し、術後にホルモン療法を行う患者さんの多くを地域の医療機関と一緒に診ています。抗がん剤治療や副作用の強い薬の管理までお願いするのは難しい場合もありますが、ホルモン療法であれば協力していただける医療機関は少なくありません。センター化をきっかけに連携先がさらに増えれば、患者さんをより地域で支えやすくなると考えています。

今後の地域に向けた取り組みとしては、一般の方への情報発信にも力を入れていきたいです。2026年9月に市民公開講座で私が講演する予定であるほか、以前から院内で栄養課やリハビリテーション科部などが患者さん向けにミニ講座を開いているので、今後はそちらにも乳腺センターとして参加し、乳がんや治療について知ってもらう機会を増やしていく予定です。

消化器外科から乳腺へ、「たまたま」が専門に

——高知県では乳腺外科医が不足しているといいます。南喜本先生はなぜ、この分野を専門にしたのですか。医師を志した理由からお聞かせください。

あまり高尚な話ではないのですが、医師を意識したきっかけは小学生の頃に読んだ漫画『ブラック・ジャック』です。ブラック・ジャックは脳外科だろうが消化器外科だろうが、何でもできる。「こんなスーパードクターがいるんだ。自分もなれたらカッコいいな」と漠然と憧れていました。

父が警察官だったので、子どもの頃は自分も警察官になると思っていました。でも、自分はさほど正義感が強くないかなと（笑）。それで改めて将来を考えて、高校生の頃から外科医を目指すようになりました。

ただ、乳腺外科医になったのはたまたまです。私はもともと消化器外科医で、母校である高知大学でも消化器を中心に診ていました。大学の外に出て戻った際、偶然、先に紹介した杉本健樹先生の乳腺グループに配属されたんです。当初は「消化器をやらなくていいのかな」とも思いましたが、乳腺も手術が多く、とにかくやることが多い。悩んでいる暇もなく、目の前の診療に取り組んでいたら、いつの間にか乳腺が専門になっていました。

——乳腺外科医として経験を重ねる中で、その魅力をどう感じるようになりましたか。

乳腺診療は基本的に、初診から検査、診断、手術、術後治療までを自分で組み立てていきます。生検や細胞診も行います。消化器外科では内科で診断がついてから患者さんが紹介されてくることが多いので、そこは大きな違いですね。最初から最後まで関われるのは、大変さもある一方、大きな魅力だと思っています。

過去の患者さんを振り返って印象に残っているのは、むしろ治療がうまくいかなかった方です。順調に治療を終えた場合は「良かったですね」で終わることが多いのですが、治療をしてもうまくいかなかった方は、「あのとき、あの治療を行っていたらどうだったろうか」と振り返ることがよくあります。

そんな経験を重ねる中で、医師としての考え方も少しずつ変わってきました。若い頃はどうしても治療を重視しがちでしたが、結果につながらず、患者さんやご家族が辛い思いをすることもあります。それなら、もう少し早い段階から緩和ケアを提案するののも一つの方法ではないかと。当院は緩和ケア専従医がいないため、地域の緩和ケア病院と連携しつつ、患者さんの思いを早めにくみ取りながら診ていくことが大切だと考えています。

患者の本音をチームで共有、安心できる診療へ

——最後に、センター長としての展望をお聞かせください。

まずは、各分野の専門職が一人の患者さんに対してより積極的に、横断的に関わり、満足度や治療効果を高めたいです。地域の先生方にもセンターのことをもっと知っていただき、紹介しやすい体制を整えたいです。今はご紹介いただいたから診察まで1~2週間ほどお待たせすることがありますが、できれば1週間以内には診られるようにしたい。こうした取り組みを通じて、将来的には多くの患者さんを選んでもらえるセンターに育て、病院運営に貢献したいと考えています。

——「患者さんの満足度を高めたい」というお話がありました。そのために、特に大切にしていることは何ですか。

一番大切にしたいのが、患者さんの安心感です。例えば当院では、がん看護専門看護師が初診の外来から入院、手術、退院後の外来まで継続して関わっています。「外来で話した看護師さんが病棟にもいて、安心して手術を受けられた」と言ってくれる患者さんもいます。

患者さんの中には医師に遠慮して、「ここがつらい」「本当はこうしたくない」といった本音を言えないことが少なくありません。しかし、看護師や薬剤師にはポロツと本音を話してくれることがある。そうした声もチームで共有できれば、薬の処方を含め、患者さんへのアプローチや支え方を変えることができるでしょう。

医師だけでなく、それぞれの専門職が同じ目線で一人の患者さんを見ている——。そんな安心感のある診療を、この乳腺センターで実現していきたいです。

◆甬喜本 憲弘（ほきもと・のりひろ）氏

1999年高知医科大学（現・高知大学医学部）卒業。2008年高知大学医学部外科学講座（外科1）に助教として着任し、乳腺・甲状腺を専門に診療。2012年高知赤十字病院に赴任。現在、同院第三外科部長、乳腺センター長。日本外科学会指導医・専門医・認定医、日本乳癌学会指導医・専門医、マンモグラフィ読影資格（評価AS）、がん治療認定医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

